

奈良・平安時代の宮ヶ瀬遺跡群の研究Ⅲ

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

(5) 宮ヶ瀬遺跡群の仏堂と周辺地域の仏教文化

はじめに

古代の宮ヶ瀬集落の一角には仏堂と推定される礎石建物が発見された。その内容を概説し、集落との関わりと県西北部の周辺地域の仏教文化の影響などを考察したい。

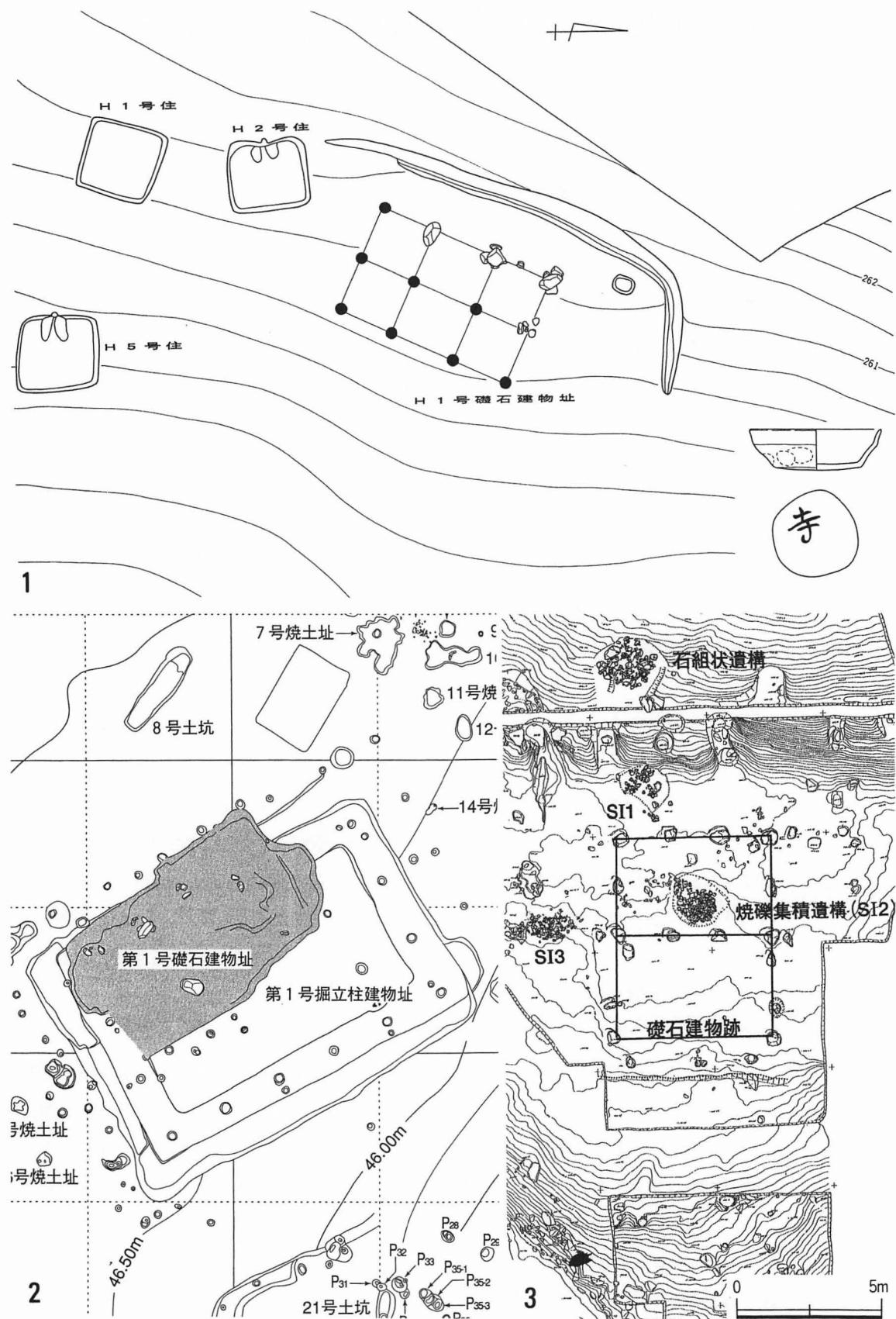
礎石建物と宮ヶ瀬遺跡群の集落

礎石建物が検出されたのは宮ヶ瀬の最大の台地で古代集落の中心がある馬場・北原地区の南西端である。山裾が台地に変わりつつある傾斜地に位置し、傾斜地をカットして小さな平坦地をつくり（以下平坦地を段切りと称する）、その上に構築している（第1図）。

礎石建物のある段切りは残存部で南北約12m×東西5mの小さなもので、東側に古代集落を見下ろすやや小高い立地になる。集落との比高差は5～15mほどである。北側と西側は約1mのほどの高さの切り落とした段で、段下には排水溝が巡っている。東側は本来なら段切り平坦地からゆるやかに傾斜したはずだが、江戸時代に大きくカットされて現況では垂直に近い段となっている。礎石建物と段切り平坦地は江戸時代の造成で半分近く失われたと考えられる。段切りは竪穴住居と同じような覆土で埋没していた。礎石建物は遺存は良くないが、それでも3基の礎石と1基の根石群があり、小さな石なのに動かなかったのは早くから段切りが埋没したせいだろう。基壇はなく、地山直上に近い。礎石はいずれも西列の礎石で2基は根石の上に据えられている。礎石は50～80cmの大きさで、段切り地山上に厚さ10cm程度、客土を入れて整地しているが、根石はその土で固定されたと推定される。ただし、客土は版築のように固められた形跡はあまりなかった。遺物は建物周辺の地山近くで大型の釘5本と灯明皿転用の土師器壙が出土した。釘は長いもので16cmを越え、宮ヶ瀬遺跡群ではほとんど例のない製品である。土師器壙は平坦地北東炭隅のピット状の土坑または墓坑のすぐ近くで完形で見つかり、段切りの地山の直上だった。土師器壙は九世紀中頃のものである。礎石建物は現況では2間×1間しかわからないが、段切りの大きさから南北3間×東西2間に復元されている。宮ヶ瀬遺跡群で古代の礎石建物は本例だけである。

調査当初はなぜ礎石建物があるのか、遺構の性格に首を傾げたが、近隣の竪穴住居と土坑から「寺」墨書土器二点が出土し、周辺遺構に灯明皿転用の土師器・須恵器が極端に多いこと、転用硯が南隣のH1号竪穴住居から出土したことなどから仏堂と判断した。また段切り南の斜面に竪穴住居があるが、ほぼ同時期の竪穴住居であり、H1号竪穴住居からは前述のとおり転用硯が床直に、H5号竪穴住居からは「寺」墨書の土師器壙がカマド崩壊土中から発見された。少し下れば台地が広がっているのにわざわざ仏堂と同じ斜面を占地していることから、この二軒の竪穴住居は寺の関連施設の可能性がある。これらの出土品の年代から仏堂は九世紀前半に成立し、九世紀後半から末頃廃絶したと推定される。

この仏堂は景観の点から集落よりやや高い位置に建てられたと考えられ、同時期の古代集落を見下ろし、村の守りとして集落構成員を安心させる意味があったのだろう。また神聖なものを高く置くという意味もあっただろう。同時期の集落（馬場・北原地区のみ）については8章の「集落の特性」で示されたように3～



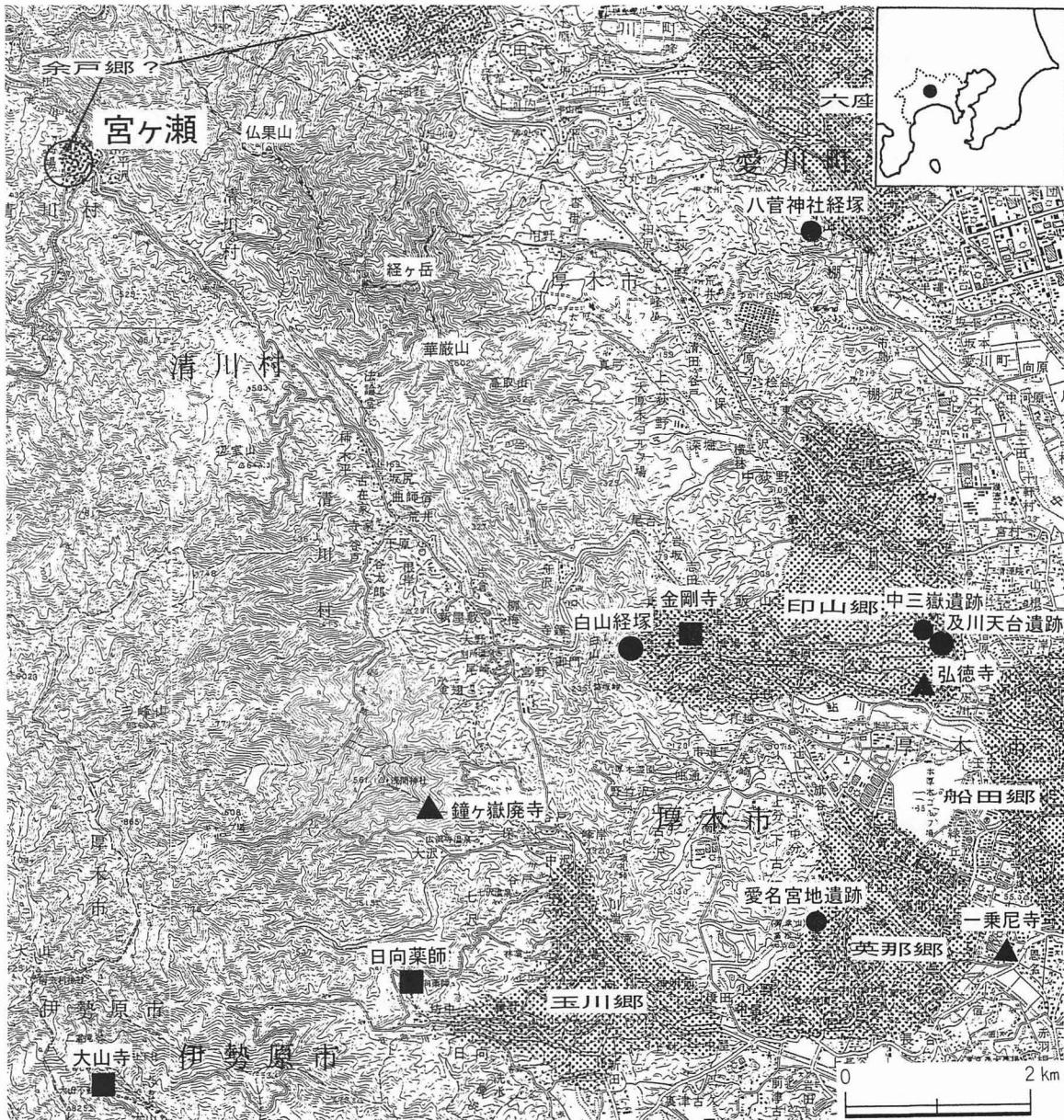
第1図 宮ヶ瀬遺跡群仏堂施設復元図（1）と厚木市愛名宮地遺跡の仏堂（2）、岐阜県藤橋村寺屋敷遺跡仏堂（3）

※いずれも縮尺1/200 遺物は1/4

6軒の堅穴住居で変遷しており、集落としては規模が小さい。

九世紀の東国集落の中で、仏堂施設が一般的だとは言えず、むしろ少ない事例だろう。このような東国集落内の仏堂施設は、千葉県に多く検出され、「村落内寺院」と称して、二十年ほど前に研究が始まった（須田勉1985、房総風土記の丘1991）。その後、笛生衛氏らによりさらに類型化されて、ムラの中の比較的大きな寺、小さな堂、修行場、山林寺院など性格差があることが指摘されている。関東の他地域についても須田亜紀氏らや須田勉氏、富永樹之、大坪宣雄氏、橋本澄朗氏、田中広明氏、宮滝交二氏らにより集成・考察が行われているが、一般的にこれらの仏堂施設は、①本格的寺院と異なり、本格的伽藍配置や寺域を画する大溝などをもたず、瓦屋根は皆無または部分的で、掘立柱建物のケースが多い②千葉県に多く集中し、郷内にも複数の仏堂施設が建つほどであるが、他県に関してはそんなには発見されない③ほとんどの例が9世紀～10世紀前半に建立・維持が確認されるが、それ以降は、廃絶する場合が多い、とまとめられる。礎石建物については類例が少ないと、確認されており、礎石は本格的な古代寺院と比較してかなり小さいといえる。岐阜県藤橋村の寺屋敷遺跡には山村の斜面の平場に礎石建物があり（第1図）、立地、形態共に宮ヶ瀬例とよく似ている。仏像の螺髪や多口瓶、多数の大型釘などが出土しており、仏堂であることは間違いない。

宮ヶ瀬周辺地域には古代の佛教関連の遺跡、史跡、寺院はかなり多い。特に宮ヶ瀬遺跡群から南の厚木市、伊勢原市、愛川町に多く、北の津久井町にはほとんどない。第2図にまとめたが、■は現在も存続の寺院、▲は古代瓦散布地（廃寺）、●は佛教関連遺跡（仏堂施設、經塚など）とした。宮ヶ瀬の南、約10キロの伊勢原市にあるのは阿夫利神社の別当寺の大山寺である。『吾妻鏡』にも記載があり、平安時代末期の經塚も確認されている。阿夫利神社は『延喜式』に記載があり、大山寺も平安時代前期まではさかのぼると考えられる。同じく伊勢原市の日向にある宝城坊は日向薬師として知られた山岳寺院である。平安時代中期の歌人相模の歌に日向薬師のことが歌われており、平安時代の仏像も4体残している。厚木市の七沢には鐘ヶ嶽廃寺が存在する。標高561mの鐘ヶ嶽は丹沢山地の東側に当たり、その中腹、標高350mあたりの平場で多量の平安時代の瓦が採集されており、軒丸瓦や角釘も含まれている。これも密教や山岳信仰に関わる山岳寺院と推定され、さらに登った山頂部には、磐座も存在する。この山は、現在も修験道の巡礼道にあたる。宮ヶ瀬の南東の厚木市飯山には、金剛寺がある。平安時代の本尊をもち、『吾妻鏡』に記述がある。すぐ近くの白山からは平安時代末期の經塚が発見されている。飯山の隣の及川では布目瓦の散布地である弘徳寺境内があり、すぐ北の及川天台遺跡からは堅穴住居出土の9世紀代の土師器壺に「寺」墨書が確認されている。さらにやや北の中三嶽遺跡からは堅穴住居床から灯明皿に転用した20点近くの土師器・須恵器壺が完形で出土した。厚木市愛名の宮地遺跡では布堀りの大型建物が当初作られた後、基壇の礎石建物に作り替えられており、共に仏堂施設と推定されている。瓦塔が数十点、仏鉢形土器、多数の灯明皿、「寺」墨書土器などが出土し、8世紀後半から9世紀後半までの存続が予想される。谷戸の平坦地に立地し、周囲に集落も確認されておらず、修行場的な性格もありうる。また厚木市尼寺原の台地では布目瓦や軒丸瓦を出土した地点があり、かつては礎石も確認されたという。現在は完全に工場建設により消滅したが一乘尼廃寺と仮称される。宮ヶ瀬から東の愛川町には修験道の拠点であり、境内の經塚群から大量の平安時代末期の經塚壺が出土した八管神社がある。また宮ヶ瀬の東には「仏果山」「経ヶ岳」「華厳山」などの山が連なるが、これらの仏教に関わる山名は修験道の巡礼ルートに因る。この付近の修験道の道のりは様々だが、これらの峰と共に先ほどから触れた八管神社や厚木市の白山、鐘ヶ嶽、伊勢原の日向薬師、大山寺は通過点であったことは知られている。宮ヶ瀬もそのルートにのっている可能性があり、それがもし古代にさかのぼるのなら、多くの修行者が立ち寄



第2図 宮ヶ瀬遺跡群周辺の古代佛教関連遺跡・史跡（トーンは古代の郷推定範囲）

ったはずである。

このように周辺の古代佛教関連の史跡・遺跡を見てみると、半数以上が山岳信仰に関わるものである。つまり平安時代に丹沢の南西部は山岳信仰や修験道に関連して佛教・密教が盛んな地域だったといえる。宮ヶ瀬のようなあまり人口も少ない山村になぜ仏堂施設があったかこのことが深く関わっていると推定される。すなわち、修行者や私度僧の影響で宮ヶ瀬のムラの人々は早くから佛教を信仰し、村人の信仰の場と修業者の立ち寄りの場として仏堂を建立したと推定される。その建立には教団・修行者やその庇護者の協力・援助もあった可能性がある。同じ頃、相模の平野部の集落ではまだ仏堂を持つ例はまれである。それは集落の規模に左右されるわけではなく、むしろ教団や修行者の影響が少なかったせいであろう。千葉県に他地域と比較して異常に仏堂施設の多いのも佛教教団や私度僧、修行者の活動が盛んで、権力者の庇護も強かったのであろう。

※紙面の都合上参考文献はカットさせていただいた。

(富永樹之)

(6) 宮ヶ瀬遺跡群検出遺構について

はじめに

宮ヶ瀬遺跡群における古代の遺構分布密度は決して高いとはいえない。山間地であることがその大きな理由の1つであろうと容易に想像がつく。当遺跡群から検出された遺構は堅穴住居址、掘立柱建物址、礎石建物址、堅穴状遺構、焼土址、溝状遺構、土坑である。ここでは竈を持ちながら炉を設ける堅穴住居址について触れてみたい。

炉址の概観と位置づけ

宮ヶ瀬遺跡群からは奈良・平安時代に属する堅穴住居址が62軒検出されている。そのうち竈を持ちながら炉を設ける堅穴住居址が13軒あることが判明している。発掘当初からその存在が注視され、用途あるいは機能について考察されている。昭和60年から調査が開始された落合地区のナラサス遺跡では6軒の堅穴住居址の内、3軒から炉址が検出されている。H3号住居址からは床面中央とやや東よりに8cm程掘り込んだ70×40cm、40×35cmの楕円形を呈する2基、H5号住居址中央部から66×43cm、47×32cmの大小2つの炉址が検出された。H6号住居址からは35×20cmの浅い掘り込みが検出されている。報告では炉址について「宮ヶ瀬は現在でも冬場においては寒さの厳しい地域として知られており、住居址内の暖をとるための施設として機能していたととらえる」としている。宮ヶ瀬地区の馬場(No3)遺跡では比較的大型のH3号堅穴住居址から4基検出されている。近世や平安時代の土坑に壊されていない2基のうち炉址1は68×46cm、深さ10cm、炉址3は80×53cm、深さは13cmの楕円形である。他の2基も同程度の規模であろう。その用途は「寒冷地のため、保温を目的とした遺構」としている。しかしながらそれだけでは62軒中13軒が炉を持ち、それ以外の多くの住居址に炉がないことが説明されないのでないだろうか。簡単に構築できる炉を設げず、寒さに耐えていた訳ではあるまい。

また、宮ヶ瀬地区馬場(No6)遺跡ではH3号住居址の床面中央部から炉址が検出されている。宮ヶ瀬遺跡群の他遺跡において発見された事例と比較して「かかる炉の構築が時期的な偏りを見せるものではなく、かなり長期にわたってその存在が意識され続けていたものと理解される」と報告している。そして「その保有の差異が果たして何に起因するかは問題を残すところである」ことも指摘している。北原(No10)遺跡でも7軒中6軒の住居址で炉址が検出されている。H1号堅穴住居址の炉は床面ほぼ中央に42×25cm、深さ6cmの楕円形を呈する。H2号堅穴住居址では中央やや南西寄りに89×49cm、深さ14cmの楕円形、H3号堅穴住居址では南東部に50×40cm深さ4~7cmの不整形の炉址が検出された。H5号堅穴住居址の炉址は中央部に設置されているが北側を中・近世の長方形土坑に壊されている。長軸が152cm、短軸は推定で100cm前後の楕円形で深さは25cmある。純焼土も13cmの厚さで堆積している。H6号堅穴住居址では床面中央やや北西寄りに86×75cm、深さ3~7cmの楕円形の炉が検出された。H7号堅穴住居址は床面が上・中・下位の3面あり、炉址はそのうち上位の床面で検出された。57×15cmの不整楕円形を呈し深さは2~3cmである。9世紀前半のH6号堅穴住居址を含むことから「炉の設置に時間的隔たりのない」ことを指摘している。実際に炉址が検出した宮ヶ瀬遺跡群の堅穴住居址の時期は出土遺物から9世紀前半から11世紀前半までとなり長期にわたっている。これにより単に一時的な流行ではなかったことが証明されている。

このほか表の屋敷(No8)遺跡でもH11号堅穴住居から炉址が検出されている。炉址は上端部で82×71cm、深さ16cmと大型で不整の長方形もしくは楕円形を呈している。南面には比較的大きな礎を横向きに立てた状態で埋設していた。遺跡群の他遺跡から検出された炉址との形状比較と、攪乱が多く竈が検出され

ていないのは構築されなかった可能性があるとし「むしろ囲炉裏に近い様態を示す」と考え、類例の増加を待ちたいとしている。

炉を必要とする生産活動

これら暖をとる施設や構築時期の問題について中田英氏は中津川下流域の愛川町半原にある半原屈中原遺跡との関係に視点を置いて言及している。それは宮ヶ瀬遺跡群の人々が「厳冬期には半原屈中原遺跡へ下りて暮らす」とする考え方である（中田2000）。この場合あまり使い込まれていない炉や、少数の住居址のみ炉を使用していることも納得できるとしている。つまり炉の機能を「暖をとるための施設」として捉えて、厳冬期の移動までの間に臨時に使用したとするものである。しかし厳冬期に半原地区に移動したという明確な証拠が見つかっているわけではない。可能性がないと断言はできないが、ほかにも何らかの炉を必要とする理由があったのではないかと考えてみたい。

この時代の炉を設ける竪穴住居（建物）址に鍛冶関連の遺構があることは広く知られている。しかしそれらの遺構には鉄滓など関連遺物が出土する。また、工房址として独立し、竈を持たない場合も多い。宮ヶ瀬遺跡群から検出された竪穴住居址の場合は「竈+炉」である。鍛冶関連遺物に関しては遺跡群全体をみても極めて少ない。その点で鍛冶関連遺構ではないと判断せざるを得ない。では「竈+炉」はなんであろうか。表の屋敷（No.8）遺跡で指摘された囲炉裏の可能性も否定できないが、この時代の一般的な調理施設は竈である。炉の機能を「暖をとるための施設」以外で調理と切り離して考えた場合は、別の何らかの手工業生産と関連すると考えるのが妥当ではないだろうか。深澤靖幸氏は「武藏国府における手工業生産」のなかで鍛冶炉について考察する中で、鍛冶以外にも炉を必要とする手工業生産があったことを想定している（深澤2003）。深澤氏は熱処理技術に伴う冷間鍛造技術（いわゆる鍛金）や、膠の採取、漆の精製、金属製品への漆の固着などが想定されるとしている。膠や漆について言えば当時の生活に密着していた消費財であろう。膠は動物や魚類の皮・骨などに含まれるコラーゲンを加工したもので、原始的な接着剤である。漆も接着剤や装飾用として古くから使用してきた。このほかにも草本類から纖維を取り出す事が行われたかもしれない。繭から糸を繰る作業も想定できよう。

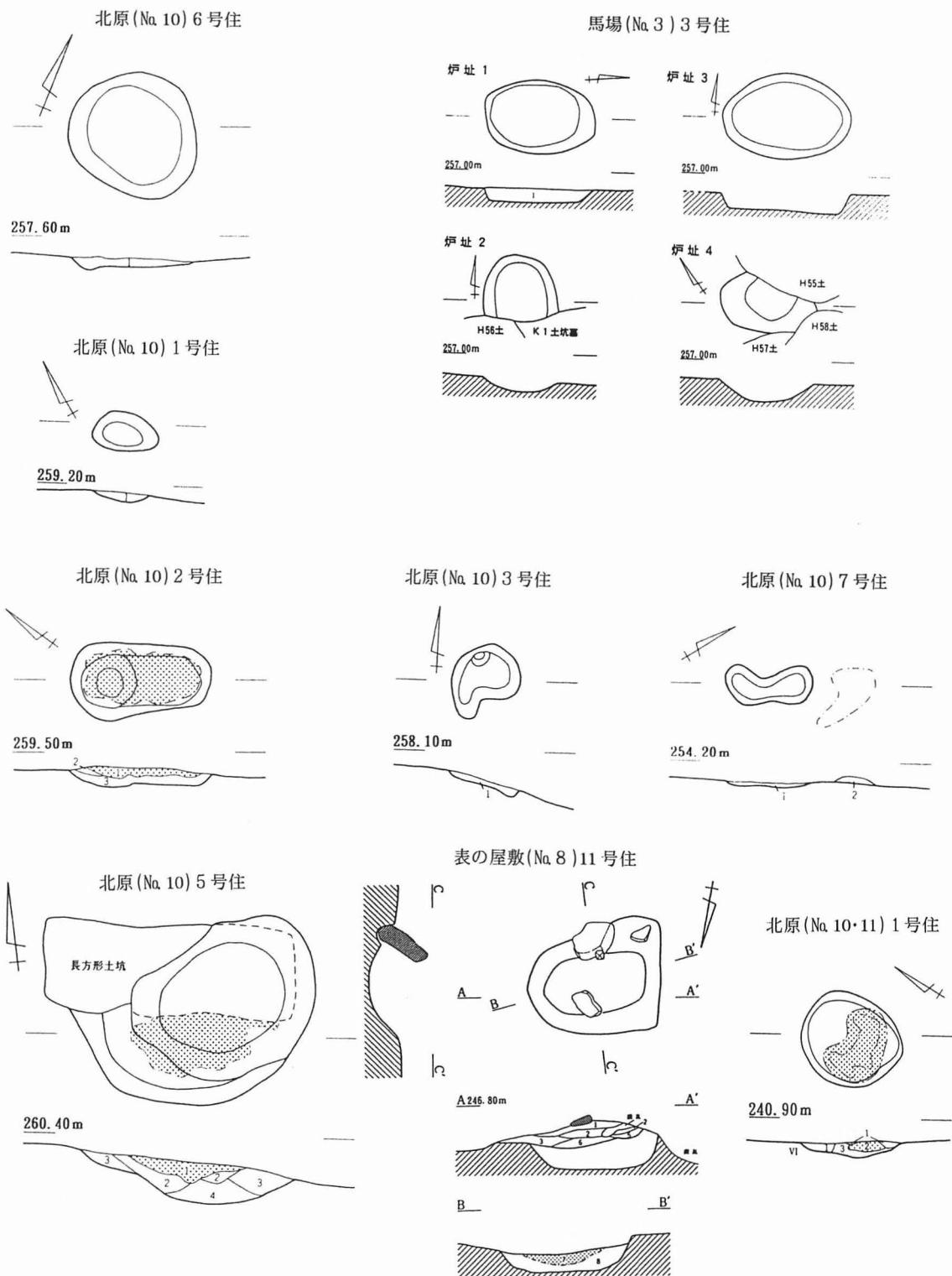
まとめ

律令に調を調達するため各戸に漆と桑を植えることが奨励されていた。漆製品・生漆、絹織物・糸・真綿などの生産技術が山間地にも及んでいた可能性はある。実際に原料となる樹木も、生産された絹や綿も遺跡から発見されることは大変難しい。もちろん宮ヶ瀬遺跡群から出土しているわけではない。しかしこれらが実際に集落の中で生産されていた可能性は高いと考えられる。痕跡が残りにくいこれら手工業生産作業の、唯一の痕跡が、この炉址ではないだろうか。使い込まれていないのは季節労働的な要素のため、複数の炉が検出されたのは違う時期（年）に新たに構築し直しているためと理解することも可能であろう。また、租税だけでなく日々の衣食住、特に衣料に関する事、接着剤などの道具類の生産に関わる生活に密着した遺構の可能性はないだろうか。山間集落における生産活動を考える上では、周囲の自然環境が与える影響が大きいのは確かである。それらを生かした生産活動を想定するには、この竈を持ちながら炉を設ける竪穴住居址が果たす役割が鍵になるとを考えたい。また今後、類似事例が調査された場合はその裏付けとなる遺物の検出に細心の注意を払うと共に、炉・竈堆積物の土壤分析による対比なども解明の一助となるであろう。

（加藤久美）



第3図 「竈+路」の堅穴住居址 (1/60)



第4図 爐址 (1/40)

参考・引用文献

- 中田 英 2000 「炉を設けた竈をもつ竪穴住居址について」『山梨縣考古學協會誌』第11号
 深澤靖幸 2003 「武藏國府における手工業生産」『府中市郷土の森博物館紀要』第16号
 伊藤智夫 1992 『絹 I』法政大学出版局
 福田健司 1986 「南武藏における平安時代後期の土器群－11世紀代の土器群－」『神奈川考古』第21号

(7) 「かながわ出土品データベース」から見た宮ヶ瀬遺跡群

はじめに

これまで2年間にわたり、奈良・平安研究プロジェクトチームでは、宮ヶ瀬遺跡群に関する遺跡概要のまとめと、出土土器・陶器の組成と特色及び時代区分と様相について発表してきた。今年はそれらを踏まえつつ少し違う視点も取り入れ「かながわ出土品データベース」のなかの“報告書図版データベース”と一昨年に行った遺跡概要のまとめをもとに検証を進めてみたい。

“報告書図版データベース”とは、財団法人かながわ考古学財団及び神奈川県教育委員会、県立埋蔵文化財センターが手がけた約400の発掘調査により出土した遺物についてその管理と活用のため各報告書の挿図(写真・拓本)を抽出し、そのすべてを対象にして、1999年より継続して作成されているもので2004年9月30日現在、約25万件の出土遺物のデータが蓄積されている。また各出土遺物について、それぞれ約40の項目(遺跡名・時代・器種・形式・出土場所など)が入力されており、挿図や写真などの画像も埋め込んであるのでその出土品を瞬時に確認できるものとなっている。さらにこの“報告書図版データベース”と他のデータベース(整理箱データベース、一括管理遺物データベース、出土品データベースetc)…これらを総称して「かながわ出土品データベース」と呼ぶ…をリンクさせることにより出土遺物が今どのようなところに収蔵されているか、あるいは貸し出されているなどの管理・活用も行うことができ、遺物の管理を効率的に行なうことが可能になり、埋蔵文化財活用のための基盤整備の一翼を担ってきた。つまり遺物の住所録といえるのである。なお原則としてこのデータベースに載っている遺物は、県立埋蔵文化センターに収蔵されている。(＊「かながわ出土品データベース」は「桐」というソフトを用いて作成している。＊＊報告遺物以外でも特に重要と思われる遺物に関してはデータベースにのせている。また本文中にも述べたようにこのデータベースはあくまで県立埋蔵センターに収蔵されている出土品を対象にしており、神奈川県内の出土品のすべてを網羅するものではないという点に留意されたい。つまり神奈川県及びかながわ考古学財団が手がけた発掘調査を主体としており民間調査団や市町村の発掘調査に関しては一部を除きデータ入力をしていない点に注意してほしい。)

データベース上における宮ヶ瀬遺跡の器種の特徴(その1…土製品)

それでは、まず宮ヶ瀬遺跡群の奈良・平安時代の出土品にかんするデータを(表I)にのせる。これをもとにデータベースに収められている奈良・平安時代の遺跡と比較検討してみたい。また前回までは土器に注目してきたので、今回は土器以外に焦点をあててみようと思う。(もちろん土器に関しても多少は言及するが。)比較の一例として昨年の木村論考でも比較した草山遺跡を載せる(表II)。また当麻遺跡、田名稻荷山遺跡など相模川水系の他遺跡に関してデータベースを用いて調べた。その結果、器種に関していうと特に大きな差はみられなかったが、もう少し掘り下げてみようと思う。あわせて「かながわ出土品データベース」に含まれている古代関連のデータを器種ごとに何点報告されたかも載せた(表III)。古代に関して現在報告されている遺物の総数は約3万3千件弱で、これは全時代報告遺物の13%にあたる。さて、この中で注目に値するものとしてまず土製品をみてみよう。宮ヶ瀬遺跡群で発掘された遺物の中でデータベース上、土製品に分類されたものはすべて土錘である。土錘は当然ながら漁撈具であり、そしてそれが宮ヶ瀬という内陸部の山村にもみられることは何を意味するのだろうか。また、これは相模川流域全体の傾向を意味するのだろうか。このような点をまず考察してみたい。古来相模川(上流の山梨県では桂川)は交通の動脈としての機能を果してきた。江戸時代には河口から山梨県の猿橋まで船でさかのぼれたという。また津久井湖あたりか

らも半日から4時間程度で平塚まで下れ、風が順風なら半日でさかのぼれた。ただし、さかのぼるのには3~4日かかるのが、通例であったようだが。今日思う以上に川は交通の要衝であった。このような点から宮ヶ瀬遺跡群を考察してみるとまた違った面も見えてこよう。データベース上に記録されている土錘の発掘された遺跡とその数について（表IV）に載せる。総計で505例になるがこれは古代の報告遺物の1.5%になる。そして相模川流域の遺跡に出土例が多く見られる。そのなかでも宮久保遺跡の報告数は桁違いで347例を数える。その他の遺跡に関してはほとんど数例から十数例にとどまる。そうした中、宮ヶ瀬遺跡群の報告数は17とかなり多いがこれは宮ヶ瀬遺跡群の古代に関する報告数の1.6%を占める。特徴がないようだがデータベースにおける全報告数から宮久保遺跡（宮久保遺跡の全報告数5404件中347件が土錘…6.4%）の分を除くと土錘の報告数は、総数の0.5%弱を占めるに過ぎない。それを勘案すると宮ヶ瀬遺跡群の報告数は他遺跡に比較してかなり多いと言えるのである。これは何を物語っているのだろうか。宮ヶ瀬のような山間地では耕地の確保は至難であり住居址も中津川の浸食作用により形成された段丘崖（斜面）の上下の際に多くみられ、中津川に流れ込む小さな沢沿いに存在することから、生活用水を確保するとともに土錘等をもちいて漁撈もおこない、川魚等も利用していた証といえよう。山林を利用するのほか、利用できるものはすべて利用するというライフスタイルであったのだろう。つまり生活の厳しさの現れであったのだ。

また前年の木村論考での甲斐型土器に関する報告や、住居跡のかまどの仕様についての報告を参考にして宮ヶ瀬遺跡群と甲斐の国の関係について考察すると、陸路水路とともに甲斐からの直接的な接触が認められるとしているが、これに関してもやはり河川（相模川水系）が重大な役割を果たしていたと言えそうだ。

(表I) 宮ヶ瀬の種別

種別	件数
灰釉陶器	23
須恵器	269
土師器	595
鉄製品	68
木製品	1
銭貨	1
鉄滓	1
石製品	37
土製品	17
種子	6
合計	1018

(表II) 草山遺跡の種別

種別	件数
灰釉陶器	129
須恵器	539
土師器	2493
綠釉陶器	8
鉄製品	298
木製品	1
銭貨	2
鉄滓	12
石製品	118
土製品	2
瓦	1
石器	2
骨角製品	1
合計	3610

(表III) データベースの古代における種別報告数

種別	件数	種別	件数
灰釉陶器	1501	金銅製品	5
須恵器	8245	人骨・獸骨類	56
土師器	18330	種子	75
綠釉陶器	153	ガラス製品	7
鉄製品	2101	銅製品	41
木製品	599	銅滓	3
銭貨	8	土師質土器	406
鉄滓	20	陶器	29
石製品	635	磁器	63
土製品	734	土器など	34
瓦	234	須恵質土器	53
石器	150	その他（石・貝）	4
骨角製品	17	炻器	34
金属製品	4	合計	32731

データベース上における宮ヶ瀬遺跡の器種の特徴（その2…金属製品）

さて次に金属製品について考察してみたい。宮ヶ瀬遺跡群の金属製品（鉄滓を含む）の古代における発掘報告例は70例（槍鉋、火打金、鎌、短刀、鉄鎌、刀子、短刀、紡錘車、その他）である。（表V）これは、古代宮ヶ瀬遺跡群の全体報告（1018）の6.9%にあたる。宮ヶ瀬遺跡群で特徴的なものは、金属製品の報告についていえば、そのほとんどすべてが鉄製品で銅製品は銭貨（元豊通宝=北宋錢）を除くとまったく報告されていない点にある。ただ鉄製品についていえば、かなりの器種がそろっているのでそう見劣りしないように見える。「かながわ出土品データベース」における古代の報告数全体では金属製品の報告は2179例で古代

遺物報告数の6.5%を占めている。…表Ⅲ（その内訳を簡単に示すと、銭貨8、槍鉋9、円環8、火打ち金9、鎌80、鍬鋤8、錐9、釘339斧8、鉄鎌234、刀子511、紡錘車40、鎌17、鑿25、鉄滓20、不明362、その他492となっている。）

これは宮ヶ瀬遺跡群の器種割合とほぼ同じである。ただし金銅製品やガラス製品など高級感のある製品は宮ヶ瀬にはまったく出土せず実用本位であった。ただ、鉄製品は当然のことながら当時においては貴重なものであったため、出土数に関してあまりこだわらないほうがよいという見解がある。それは、鉄製品は鋳なおせば何度でも使えるということである。したがって鉄器を捨ててしまうということはめったになかった考え方られるのだ。村落が放棄されるにあたり持ち去ったであろうし、また廃棄したとしても1000年以上も鉄製品が地中に残るというのは相当な幸運であろう。したがって、発見された鉄製品は当時使用していた量のほんの一部を示すものでしかないといえるからである。だから鉄製品のみに焦点を当てるのではなく鉄製品に関係する他の製品、あるいは鉄製品を使用したと思われる遺物、たとえば、砥石や轔の羽口などにも注意したい。以上述べたように鉄製品に関しては個数のみにこだわると思わぬ落とし穴にはまる恐れ無きにしも非ずの感がある。そこで関連する石製品や鉄製品の器種に注目していきたい。宮ヶ瀬遺跡群における砥石の報告数は24件で古代の出土品の総数の2.3%にある。そしてそれは、遺跡全体に存在している。これは鉄製品がかなり普及し生産の主力を担っていたということだろう。また鉄滓の存在は小鍛冶があったことをうかがわせる。ではデータベース全体ではどうだろうか。古代に関して砥石の報告例をあげると359件で1.1%に相当する。また轔の羽口に関しては宮ヶ瀬には報告例がない。データベース全体には106件の報告例がある。さてこれら宮ヶ瀬における金属製品等の器種からどんな生活が予想されるだろうか、検証してみよう。宮ヶ瀬遺跡群の金属器の器種で言えることは装飾品、あるいは高級品がほとんど出土していないという点である。すべてが生産に関する器種であるといえる。このことは土錘のところでも述べたが生活がかなり厳しい状況下で行われていたことを想像させる。ではデータベース上に報告されている他の遺跡の金属製品にはどんなものがあるだろうか、もう少し詳しく比較してみよう。他の遺跡では、帶び金具・轡・耳環・鍬状鉄製品・鉄製小壺・鑿・鎌・銅鏡・錐なども報告されておりこれらは、宮ヶ瀬遺跡群では報告がなされていない。これも宮ヶ瀬遺跡群のひとつの特色といえよう。

まとめ

以上述べたような点から宮ヶ瀬遺跡群の存立やその特徴について次のように考えてみた。すなわち、律令体制にはころびの出た9世紀に突如出現したと思われるところからおそらくこのころの開発ブームのなかで、山間の宮ヶ瀬にもフロンティアの波が押し寄せてきたのだろう。そしてこのような山村にしては生産のためのいろいろな器種がそろっており、技術的に当時のなかではそれなりのものを保持していたと認められる。しかし、その一方で高級品は土器を含めてほとんど存在しない点から生産のための技術にはそれなりの物を持っていたにもかかわらず文化的生活という面では余裕がなかったということになろう。そのため、10世紀中ごろ開発ブームが去り社会の変化がおこると（このころ律令体制の崩壊が顕著となり全国的に見ても国衙・郡衙の遺構の存続が確認できず消滅した例がほとんどであるという。またいわゆる、律令国家から王朝国家への移行期と重なる。）、他の南関東の古代集落と機を一にして潮の引くがごとく、宮ヶ瀬に集落が見られなくなることにつながるのだろう。労働力が貴重だった当時のこと、おそらくもっと条件のよい土地へと移住した、あるいは移住させられたと考えるのが自然であろう。

さて今回の小稿のテーマは、宮ヶ瀬遺跡群の神奈川県古代史における位置付けを目指したものの一環では

あるが、むしろデータベース活用の一例と捕らえていただきたい。今回は紙幅の関係で多くのデータを表として載せられず残念である。無論データベースは、県内全遺跡を網羅したものではないが統計学的に考察すれば、ある遺跡の傾向だけでなく、県内の遺跡の傾向や他の遺跡との比較が短時間で行え、その精度にはある程度の信頼が置けるといえよう。特に一遺跡の報告書のみを扱う場合でなく、大掴みに複数の遺跡や時代を同時に扱おうとするときに大いに威力を発揮するといえる。また、出土遺物の器種や種別について多数の遺跡にあたるときなどはデータベースのメリットが、生きる展開といえるのである。そのことを踏まえ今回は、土錘と金属製品に焦点を当ててみた。特に土錘に関してはなかなか興味深い結果になった。データベース上、相模湾・東京湾沿岸の遺跡以上に相模川・金目川流域に営まれた遺跡群に多く出土が認められるからである。(表IV) これは古代における河川とのかかわりについて重大な示唆を与えていたといえそうである。今後の研究に期待したい。

(表IV) 古代における土錘出土報告数

下大槻峯遺跡（秦野市）	2	草山遺跡（秦野市）	1
宮ヶ瀬遺跡群（清川村）	17	池子遺跡群（逗子市）	21
宮久保遺跡（綾瀬市）	347	中里遺跡（秦野市）	2
御屋敷添遺跡（厚木市）	6	坪ノ内宮ノ前遺跡（伊勢原市）	1
国分尼寺北方遺跡（海老名市）	1	天神谷戸遺跡（二宮町）	1
三ツ俣遺跡（小田原市）	23	田名稻荷山遺跡（相模原市）	2
三ヶ岡遺跡（葉山町）	2	東耕地遺跡（横浜市）	1
上ノ町遺跡（茅ヶ崎市）	1	東富岡北三間遺跡（伊勢原市）	10
上粕屋川上遺跡（伊勢原市）	1	当麻遺跡（相模原市）	1
上浜田遺跡（海老名市）	2	鳶尾遺跡（厚木市）	2
神明久保遺跡（平塚市）	8	受地だいやま遺跡（横浜市）	36
大地開戸遺跡（津久井町）	1	白幡浦島丘遺跡（横浜市）	5
千葉地東遺跡（鎌倉市）	1	半原屈中原遺跡（愛川町）	6
川尻中村遺跡（城山町）	1	仏向町遺跡（横浜市）	3
総計		505	

(表V) 宮ヶ瀬の金属製品の器種

器種	報告数	備考
銭貨	1	元豊通宝
槍鉋	3	
槍鉋状鉄製品	1	
円盤状鉄製品	1	
火打金	2	
鎌	1	
鋤鉗先	1	
刀子	22	
短刀	1	
釘	9	
鉄鏃	19	
板状鉄製品	1	
棒状鉄製品	4	
紡錘車	3	
鉄滓	1	
総計	70	

最後にこの小稿を書くにあたり多くの方々にご教授、ご協力いただいた。その中でも河野喜映、富永樹之、加藤久美、吉村美知子、鈴木彩子の諸氏には特にお世話になった。御礼を申し上げる。 (小林耕一)

参考文献（主なもの）

- 鬼頭清明 1986 「古代日本を発掘する」 6 古代の村 岩波書店
 神奈川県高校地理部会編 1989 「かながわの川 上、下」 神奈川新聞社
 畠田藏郎 1981 考古学選書9 「改訂鉄の考古学」 雄山閣出版
 「清川の伝承」 1988 清川村教育委員会
 物質文化研究会 2003 物質文化 考古学民俗学研究 (76)
 東京工業大学製鉄史研究会 1985 「古代日本の鉄と社会」 平凡社選書78
 かながわ考古学財団 1998 「先人たちの軌跡」 -宮ヶ瀬遺跡群発掘調査の記録-
 富永樹之 2004 「十・十一世紀の南関東一集落・官衙・寺院・土器の変質」 中世東国の世界2 南関東 高志書店
 森 浩一 1983 日本民俗文化大系3 「稻と鉄」 =さまざまな王権の基盤= 小学館
 小林 昌二 2000 「日本古代の村落と農民支配」 城書房

(8) 宮ヶ瀬遺跡群の集落の特性

はじめに

丹沢山地の懷に抱かれた古代の宮ヶ瀬遺跡群は、一見したところ県内各地の古代集落とさして違わない外観をみせる。しかし、事象の微細な点に注意深い目を向けると、台地上、低地部に存在する通有の古代集落とは異なる実相がみえてくるようにも思える。ここでは主要施設の竪穴建物とその付属施設の一つである炉に着眼して、宮ヶ瀬遺跡群の集落の一面を述べてみたい。

宮ヶ瀬遺跡群の概観

宮ヶ瀬遺跡群は、約1.5kmの距離をおき南の宮ヶ瀬地区の6遺跡、北の落合地区の7遺跡を合わせた13遺

跡からなる。宮ヶ瀬地区では川弟川東岸に所在する上村遺跡を除く北原、表の屋敷、馬場、南、久保ノ坂の各遺跡は、現代の道路により便宜的に分断されたもので、本来は一つの集落と把握されるものである。集落規模（＝調査範囲）も南北600m×150～300mと広く、宮ヶ瀬遺跡群の中では最も立地に恵まれている。一方、落合地区の各遺跡は指呼の間にあるが、支谷により独立した集落と把握される。集落規模（＝調査範囲）は一辺100m前後から150mと小規模である。このように両地区的集落は、立地上いささか趣を異にしている。

宮ヶ瀬地区では51棟の竪穴建物、5棟の掘立柱建物、それに1棟の礎石建物、落合地区では12棟の竪穴建物、2棟の掘立柱建物などが調査された。

集落の消長

遺構の年代については、竪穴建物を中心に各報文で触れられているが、今回のプロジェクトに際して、改めて河野

表1 時期別遺構

時期区分	実年代	遺跡名	遺構名
I期	7世紀末から8世紀第1四半期	表の屋敷(No.8)	5号竪
		表の屋敷(No.8)	14号竪
		ナラサス(No.15)	遺構外
II期	8世紀第2四半期前半	北原(No.9)	遺構外
		馬場(No.6)	遺構外
III期	9世紀初頭～第2四半期前半	北原(No.10・11北)	2号竪
		北原(No.10)	6号竪*
		表の屋敷(No.8)	6号竪
		表の屋敷(No.8)	10号竪
		馬場(No.6)	1号竪
		馬場(No.6)	3号竪*
		馬場(No.6)	5号竪
		馬場(No.3)	6号竪
		馬場(No.3)	7号土坑
		南(No.2)	3号竪
IV期	9世紀第2四半期後半～第3四半期	表の屋敷(No.8)	3号竪
		表の屋敷(No.8)	7号竪
		馬場(No.3)	1号竪
		馬場(No.3)	3号竪*
		馬場(No.3)	5号竪
		馬場(No.3)	7号竪
		馬場(No.3)	1号礎石
V期	9世紀後半	馬場(No.3)	4号竪
		南(No.2)	9号竪
		大野原(No.13)	1号竪
VI期	9世紀末～10世紀第1四半期	北原(No.10)	1号竪*
		表の屋敷(No.8)	9号竪
		南(No.2)	1号竪
		南(No.2)	4号竪
VII期	10世紀第2四半期～中葉	北原(No.10)	5号竪*
		北原(No.9)	2号竪
		表の屋敷(No.8)	4号竪
		表の屋敷(No.8)	13号竪
		南(No.2)	2号竪
		ナラサス(No.15)	1号竪
VIII期	10世紀後半～11世紀前半	北原(No.10・11北)	1号竪*
		表の屋敷(No.8)	12号竪
		ナラサス北(No.15北)	1号竪

*は、炉を有する竪穴建物

が全体を統一的な時間軸でもって年代比定を行った。その結果、竪穴建物33棟、礎石建物1棟ほかの年代が示され、表1のとおりⅠ期からⅧ期までの8時期に分けられた（河野2004）。これらから集落の変遷を地区別にみてみよう。

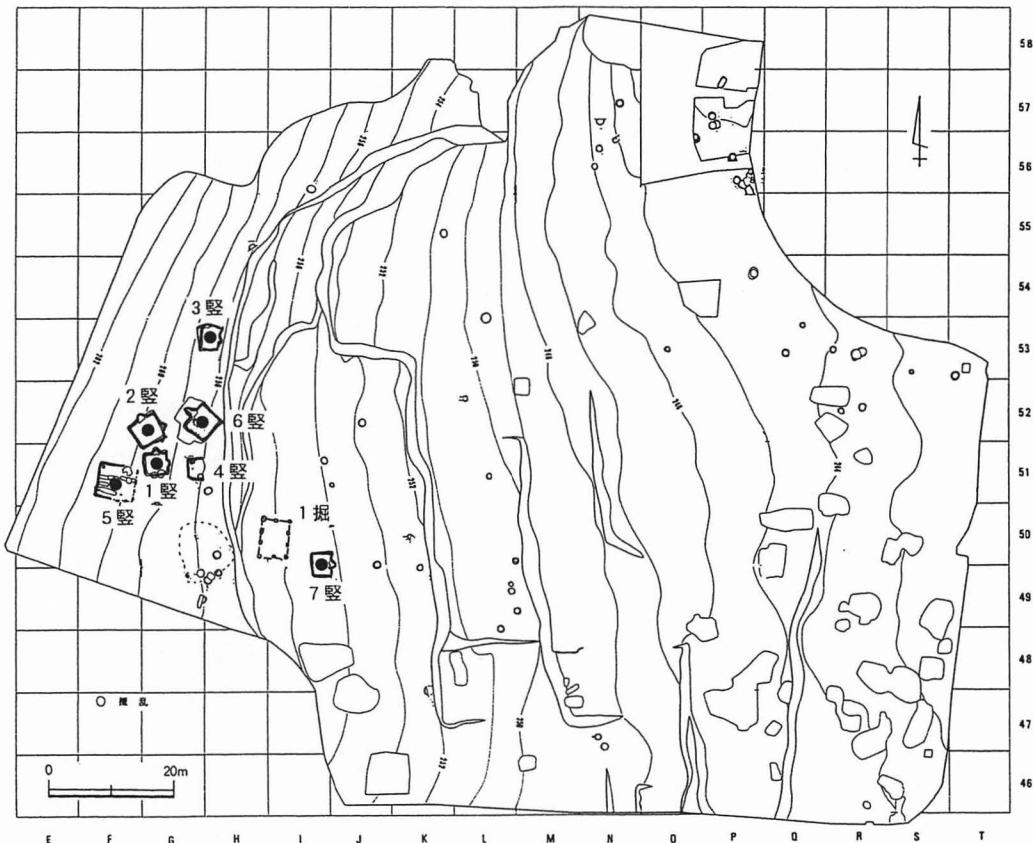
宮ヶ瀬地区では、7世紀末から8世紀第1四半期（Ⅰ期）に集落が成立し、そして出土土器から8世紀第2四半期前半（Ⅱ期）にも存在していたと思われる。その後半世紀余りの空白の後、9世紀初頭から第2四半期前半（Ⅲ期）に再び集落が姿を現す。竪穴建物は一転して集落内の各地点に展開する。そして9世紀初頭から10世紀第1四半期（Ⅲ～Ⅵ期）に充実期を迎える。その後の10世紀代に規模は縮小するものの一定程度の規模は保たれ、10世紀後半から11世紀前半（Ⅶ期）に終焉を迎える。竪穴建物は宮ヶ瀬地区内の各所を転々とした姿が垣間見える。また、9世紀第2四半期後半～第3四半期（Ⅳ期）には仏堂と思われる礎石建物が馬場（No.3）遺跡に出現する。

一方、落合地区のナラサス遺跡でも、出土土器から宮ヶ瀬地区とほぼ同時期に集落が成立したものと思われる。そして、長い空白期間において9世紀後半（Ⅴ期）に大野原遺跡に集落が出現する。その後の集落変遷過程は今一つ明確ではないが、9世紀末から10世紀中頃にかけてナラサス遺跡を中心に上原遺跡などでも集落が営まれ、最終的には宮ヶ瀬地区同様11世紀前半（Ⅶ期）にナラサス北遺跡に移遷した後、集落は姿を消す。落合地区ではナラサス遺跡が中心的な集落と思われるが、他遺跡では1ないし2棟の竪穴建物しか確認されておらず、短期・孤立的な集落像が窺える。

注目すべき事象

①集落成立の契機

集落の成立は、7世紀末から8世紀第1四半期の段階である。県下の古代集落の成立も概ねこの時期で、



第5図 北原（No.10）遺跡の遺構配置・炉を有する竪穴建物（●印）

律令体制の編戸制・班田制実施による再編と考えられる。宮ヶ瀬遺跡群の集落成立の契機もこれに求めるることは可能であるが、宮ヶ瀬遺跡群に律令制前夜の集落が存在しないこと、水田可耕地がない点を勘案すると慎重にならざるを得ない。ここでは、山間地立地という特異性から、次の可能性を考えたい。

『続日本紀』によると、和銅6（713）年に相模・常陸・上野・武藏・下野の5か国の調を布に加えて純も貢納させること、翌和銅7年には実際に純の調が貢納されたとあり、純生産が始まられたことがわかる。宮ヶ瀬遺跡群の集落の開始とこれらの記事がほぼ同時期である点をふまえ、純生産のための桑栽培或いは養蚕に伴う入植により集落が成立したと考えたい。

②堅穴建物の分布

後世の削平により堅穴建物のいくつかが消失していることを考慮しても、「段丘崖（斜面）の上下の際において多く見られます。これは宮ヶ瀬のような山間部の地域において、新たに平坦な場所を確保することが困難であることから、耕作地（畑）の確保とともに土地の有効利用を考えた故の選地であった」（近野1998）と堅穴建物の分布の特色とその意味を指摘している。

第5図は北原（No10）遺跡の遺構配置図である。堅穴建物、掘立柱建物は傾斜の緩い平坦地部分ではなく、西よりの緩斜面から急斜面に上る地形変換点にまとまって構築されている。この北原遺跡例は宮ヶ瀬遺跡群において特殊な事例ではない。その一方で、ナラサス遺跡や表の屋敷遺跡のように堅穴建物が平坦地部分に存在する事例もあるが、これらの遺跡の堅穴建物は無目的に平坦部に選地されているのではなく、堅穴建物の周囲に一定の空間が確保できるように、距離を置いて構築されているように思える。

以上から、近野も指摘するように、平坦地を畠地として利用するために、意識的にその地点を避け段丘崖の際、或いは平坦地に構築する場合でも一定の空間が確保できるように周囲の堅穴建物との位置関係に配慮した上で構築されたと考えられる。

ところで、古代においては養蚕は水稻とともに重要な生産活動と位置づけられていた。住まいの周囲に展開する畠地は園地と把握され、雑穀根菜類や桑漆などの栽培が考えられる。ただ、大宝令の「田令桑漆条」で、上戸は300根以上、中戸は200根以上、下戸は100根以上の桑を植えることが定められている。さらに桑の栽培地は林ではなく畠地と認定されてたことから、これら平坦地で、桑栽培が行なわれていたことも考えられるのではないか。

③堅穴建物内の炉

堅穴建物に付設された炉がナラサス遺跡で3棟5基、馬場（No3）遺跡で1棟4基、馬場（No6）遺跡で1棟1基、表の屋敷遺跡で1棟1基、北原（No10・11北）遺跡で1棟1基、北原（No10）遺跡で6棟6基（第5図●印）、計13棟の堅穴建物から18基確認された。この遺構数は、該期の他集落に比して異常に多く、特異な状況である。一般に炉を付設する堅穴建物は、鉄滓・羽口等を出土することが多く、鍛冶関連の遺構と理解される場合が多い。北原（No10）遺跡の2号堅穴建物からも鉄滓1点が出土しており、その可能性は否定できないが、遺構の数に比して鉄滓があまりに少なく、鍛冶関連遺構に限定するには無理がある。

ところで、秦野市草山遺跡では床面中央に炉を設け、その周囲から2点の鉄製紡錘車（1点には撚りの掛かった絹糸が残存）を出土した154号堅穴建物がある。堀田氏は、この堅穴建物を撚り糸作業は特殊と断りつつ、養蚕から繰糸までを行なった作業場と推定している（堀田1999）。また、関氏は、堅穴建物の中に桑葉の貯蔵・蚕飼いのための桑室・蚕室が存在することを指摘している（関1994）。民俗事例によると、桑葉の備蓄から繭糸抽出に至る作業工程においては、状況に応じて火氣が必要とされ、特に繭糸抽出に際しては

火気・湯は必需である。

以上から、炉の付設された竪穴建物の中には、養蚕に関連する竪穴建物が存在したものと考えたい。

④竪穴建物の埋め戻し行為

宮ヶ瀬遺跡群では埋め戻し行為を顕著に確認できた竪穴建物が存在する。河野編年で9世紀初頭～第2四半期前半とされる北原（No10・11北）遺跡の2号竪穴建物、北原（No10）遺跡の6号竪穴建物と、報文で10世紀前半とされる北原（No10）遺跡の3号竪穴建物の3棟である。報文によるとこれら竪穴建物の埋め戻しに伴う掘り込みは、斜面山側からの掘り込みが顕著で、北原（No10）遺跡の2例は2方向から、北原（No10・11北）遺跡例は3方向の掘り込み、竪穴建物の埋め戻し行為が行われている。こうした行為は、竪穴建物廃絶後窪地になった跡地を放置するのではなく、埋め戻しにより平坦地に復旧し、園地に取り込み活用するための行為と理解したい。

まとめ

以上の傍証資料から、宮ヶ瀬遺跡群の集落、そしてそこにみられる竪穴建物は養蚕、絹糸生産に関わるものではないかとの想定にたどりつく⁽¹⁾。その具体相を憶測を交え復元すると次のようになるか。

律令国家の純生産の指示に基づく形で、7世紀末から8世紀第1四半期（I期）に養蚕を行なうために人々が入植し集落を形成する。第III期（9世紀初頭から第2四半期前半）以降、炉を有する竪穴建物がみられることから、合わせて集落内で繭から糸を抽出する織糸作業も行なわれるようになる。この作業は炉を有する竪穴建物が集中する落合地区では中心的集落のナラサス遺跡、宮ヶ瀬地区では特に北原（No10）遺跡において主体的に担われたと思われる。

竪穴建物の周囲に広がる園地では桑が栽培されたが、一定規模の園地を確保するため、廃絶竪穴建物はそのまま放置されるのではなく、埋め戻され園地に復旧された様子が窺える。

北原（No10・11北）遺跡、北原（No10）遺跡、ナラサス遺跡で伴出した掘立柱建物は合わせて5棟と竪穴建物に比べるとわずかである。これらは居住施設というよりは養蚕に関わる収納施設、或いは管理施設の可能性が高いと思われる。

ところで、河野の土器編年によるとII期とIII期の空白期を除くと、土器型式上は連続したものと把握されている。しかし、特に落合地区の各集落における竪穴建物のあり方、養蚕が季節的な労働と考えられることから、恐らく宮ヶ瀬遺跡群の集落は断続的なものであった可能性が高いのではないか。（大上周三）

註

（1）本論の要旨が養蚕を念頭においたものであるため、養蚕一辺倒の限定的な内容になっているが、雑穀類の栽培、林業にも従事した集落、また、竪穴建物も養蚕単独の機能ではなく居住機能も併せ持った、複合的な集落、竪穴建物であったことは十分に考えられる。

参考・引用文献

河野喜映 2004「出土土器・陶器の時期区分と様相」『研究紀要9』（財）かながわ考古学財団

関 和彦 1994「古代の養蚕」『日本古代社会生活史の研究』校倉書房

近野正幸 1998「律令期の山棲み集落」『先人たちの軌跡』（財）かながわ考古学財団

堀田孝博 1999「古代における鉄製紡錘車普及の意義について」『神奈川考古』第35号 神奈川考古同人会

【付記】前年の論考も含め、執筆者各人の考え方を尊重し、用語、内容の統一は敢えてしていない。